

供 花

佐々木 真理

(Facebook, 2022.2.17 より 加筆修正)

2022年1月26日に義母が亡くなりました。27日が通夜、28日に告別式でした。
コロナ禍なのでごくごく身内だけで葬儀をしました。

母は花が大好きで、小原流の生け花を教えていたこともあり、たくさんの花で見送ることができれば良いなと思っていたところ、母のお花のお弟子さんが立派で素敵な花をお供えしてくださいました。供花といえばほぼ菊だらけという印象ですが、お弟子さんたちがお供えくださった花は白を基調とした清楚でかつ可憐で素晴らしい花でした。さぞかし母は喜んだだろうと思います。

母の棺をたくさんの花で囲み見送ることができました。火葬が終わって斎場に戻ると、斎場の方が残った花をくださり、妹と分けて持って帰りました。

帰宅したら母の甥御さんからとても立派なフラワーアレンジメントが届いていました。その花も母の好みそうなどとても素敵な取り合わせで、母（その方から言えば叔母）へのお気持ちを大いに感じました。

一気に我が家はたくさんの花で満たされ、花粉症の私の鼻を大いに刺激しました。

アレンジメントはそのままお供えして、持ち帰った花は早速大小6つの花瓶に生けました。



供花や弔電などお心遣いくださった方々へお礼の手紙を書いてから、萎れた花を除いて生けかえました。金魚草はすぐに萎れてしまいます。可愛らしいのに残念です。

母が入っていた施設へ荷物を引き取りに行きました。帰宅後、アレンジメントに萎れてきたものがあったので抜いて花瓶に生け替えました。

役所の手続きに行き、その後供花などくださった方々へ先日書いた手紙を同封して送る手配をし、帰宅後萎れた花を切りました。トルコキョウは白い花は丈夫なようですがピンクの色のついたものはほとんど先に萎れていきました。

こんな風にそれからほぼ毎日、萎れたものは取り除き生けかえました。

日本の鉄砲百合は早めに萎れてしまいますが、カサブランカはまさに女王といった感じで咲き続けます。その雄しべは濃い赤みの強いオレンジ色で、生けるときには雄しべを取り除いておかないと衣類等に付いたらちょっとやそっとでは取れないと言う見かけ通り強い舶来の花です。

そうするうちに花瓶は5つになりました。カーネーションも元気がなくなってきました。カスミソウは枯れてもそれなりに可愛らしく、他の花を支えたり空間を埋めたりして役立ってく





れます。しかしカスミソウが一番私の鼻を刺激してくしゃみを連発させるようです。

昔はやらされていた感が強く、なかなか楽しみを感じるまでには至らなかった生け花ですが、今こうして毎日水を替え、生け換えることで気持ちが落ち着くことに気づきました。昔は心に余裕がなかったのだとつくづく感じました。

この作業を毎日繰り返すうちに、だんだんと花も花瓶の数も少なくなり、花瓶の大きさも小さくなっていきました。そして花が減っていくとともに、近過ぎるがゆえに生じる様々な事のうち嫌なことは消えてゆき、良い思い出だけが残されていくように感じました。

更にしばらく経って、施設から持ち帰って段ボールに入れたまま積み上げていた母の衣類やその他細々したものをようやく片付けました。その夜もまた花を生けかえると、デンファレ、白い小菊、スターチスにレザーファンを添えて小さな一つの花瓶にまとまりました。

ああしてあげればよかったとか、こんなこと言わなければよかったとか、そんな自分の至らなさや不甲斐なさによる後悔ややるせなさが供花とともに少しずつ消えていき、温かい思い出と感謝の気持ちだけが残っていくように感じます。

花には浄化作用があるのかもしれませんが。

だから花を供えるのでしょうか。

(ほんの一部ですが写真を貼り付けました。写真を撮ろうと思ったのが遅く、生け換えた最後の方の花で、もうずいぶん少なくなってしまうています。)

